

第21回人間らしく働くために 労災職業病九州セミナー

in北九州

現地実行委員会ニュース No. 4 2010.4.1 発行

(当面の連絡先) 健和会労組 581-1864 Eメール intessa@jeans.ocn.ne.jp

日高携帯 090-8225-7182 ホームページ <http://kyusemi.jp/>

前号でお伝えした北九州セミナー学習企画第1弾「子供の貧困と現代日本の働き方、働かされ方」(2010年3月6日)の第2部「正木公子先生」講演の要旨を以下に報告します。

正木 公子先生の紹介

社団法人福岡医療団千鳥橋病院の副院長で、小児科の医師として治療に当たられております。日常診療の傍ら、児童虐待、貧困と健康被害の問題に取り組まれているなど、幅広く活動されています。

《 「困っている人」の医療を目指して 》
32年前、学生運動が華やかだったころ、医学の勉強はほとんどしてなくて、学生運動していました。困った人の医療をしたいということで、医師として何ができるかということを考えて、卒業して民医連に飛び込みました。

《 生活困窮家族 》

ワーキングプアの世代の方々が、家庭を持ったときに、親の不安定なストレスフルな雇用環境というか生活をしていて、子供さんが働くことに生きがいか、喜びを見出すような考え方が身についていくのかなと思う。私は小児科ということもありますけど、次の世代の子供たちの労働についての意欲がどうなのかと。社会全体として取り組んでいかなければ、とんでもない社会になるんじゃないかというのを非常に危惧しています。

今の若い人は、コミュニケーションが上手じゃない。自分の思いはすごくあるのに、思いをきちんと相手に伝えるとか、いやな目にあたり怒られたときに、きちんと話して説明できるか。理不尽なパワハラとかセクハラを職場で受

けたときに、きちんと自分が不利にならないように、反撃していくとか。働くというのはいろんな力が要りますよね。うちの地域を見ていると、朝起きて職場に行くというのが、保育園とか小学校のときに、すでに出来ていない子供が多いんですよ。親はきついから寝ている。親と一緒にダラダラグズグズして、結局遅刻が続くと不登校になるという形で、本当に貧困が再生産されているのを感じています。

《 あきらめの無自覚 》

生まれ育ったところが極貧で、働くことも出来ずに、何とかカツカツ生活保護を受けながら、先の夢もなく、楽しみもなく、毎日毎日をやっと送っている。深く考えるとつらいから生きていけなくなっちゃうんですね。あきらめていることすら自覚していない子供たちが生まれてきて、親世代と同じような生活を繰り返している。同じ病院で32年間働いていると、その世代間連鎖というのがものすごくよく見えます。この子どうなるかなと思っていたら、やっぱりこうなっちゃたか、それでも頑張れよというのが私の仕事のスタンスなんです。

《 見ようとしなければ問題は見えない 》

私自身は、子どもの虐待防止活動を自分が医師としてなすべきことはこの分野だろうと思いき、使命感としてやってきたんですが、そのときに子供の問題について先駆的な運動をやられている方たちが、「問題は見ようとしなければ見えない」と言われた。たとえば、子供の傷ついた心をケアするためには、精神科の先生たちのバックアップというか、サポートが私たちは欲しいんですけど、なかなか精神科の医師が運動に

加わってくれないんですね。薬物使っている方が多いと言いましたが、「うつ」なら「うつ」しか見ていない。眠れないと思ったら眠れないことしか見ない。なぜ、その方が「うつ」になっているのか？なぜ薬をこんなに使わないと若いのに眠れないのか？じゃあ、この方結婚していると言うけど、お家はどうなっているのか？子供さんはどんな育ち方をしているのか？そこまでズーと突っ込んでいかないと、虐待とか貧困の問題というのは、通り一遍の話だけ聞いていただだけでは、なかなか見えないんですね。

福岡で運動に加わった、私より若い世代の精神科の先生が言われていましたけど、精神科の医者トレーニングをするときに、家族の事を考えたことはあまりなかった。ましてやそのお母さんがどんな育ち方をして、今に至ったのか？過去にさかのぼってきちんと話しを聞くなんて事をしなかったし、かなりの子供のお母さんの中から子供の虐待とか、ネグレクトを見落としてきたんだろうと、言われていました。

《 貧困は社会性を失う 》

うちの近くの老人の調査で、表札がないことにビックリした。誰も訪ねてこないから表札はいらない、電話もない。緊急通報システムとして電話があれば助かるんですけど、誰からもかかってこない、かける友達もかける親族もいないから電話は要らない。本当に困った時どうしますかと言ったら、這ってでも千鳥橋病院に行くと。それは有難いことだけど、間に合わないかもしれない。脳梗塞で倒れたらどうしますかと聞いたら、路上で倒れていたら、誰かがお宅の診療所に連れて行ってくれる。頼られるのはありがたいけど、うーんと考えてしまいました。

《 健康格差は歯から 》

貧困になることが健康格差に繋がっていく。寿命とか主観的健康感とか、いろんな調査は出ているんですけど、一番如実にわかるのは歯です。うちの校区の中学校の養護の先生と、この前懇談会を持ったんですが、ものすごい未治療の虫歯の率。中学校で総入れ歯、総崩れみたいな

虫歯の方が多くて、経済的に大変な親御さんの口元を見ると、歯の健康状態は相当悪いです。虫歯というより、抜け落ちていたり、歯槽膿漏で歯茎が痛んでいるなという方とか。私たちもお金がないときは、歯の治療は後回しですよ。ホームレスの医療支援を月に一回、「冷泉公園」という所で、ホームレスの方の健康診断とか医療相談とか、ちょっとした怪我の治療とかいろいろやっているんですけど、40代でも歯はボロボロで、ほぼ無いですね。昨年、福岡版派遣村をやったときに、歯科の先生にもご協力いただいたんですけど、自分たちが出ていって何かができるレベルじゃない。少なくとも経済的な貧困のレベルをなんとかしないと、ちょこちょこっと検診したぐらいでは、何ともならないぐらいの歯の健康悪化はすさまじいと言われていました。

《 明日のない虐待児童 》

虐待を受けた子供たちが、児童相談所経由で私の外来にやって来るんで、お話を聞くんですよ。お家でどんなご飯食べているとか、勉強は何が好きとか。最初はいろんな雑談から始めていって、将来何になりたいと聞いてもまず答えがない。将来が考えられないんですよ。今日のご飯が食べられるか、明日のご飯が食べられるかどうか。今日、父ちゃんに殴られずに寝られるかどうか。今日、お母ちゃんが父ちゃんに殴られずに、家が平穏無事に過ごしていけるかどうか。目先のことしか考えられない子に、一年後あなたはどうしていますかとか、将来何になりたいですかとか、全く考えるような時間の感覚が、子供たちの頭の中に無い。その時、この質問はこの子に非常に残酷なことなんだと思って、認識を改めました。未来がない、夢がない。人生の最初で、本当にいろんな可能性を秘めていて、いろんなチャレンジができるはずの子供たちに、明日のことすら考えられないということは、やっぱり良くないことです。

《 貧困が子供たちに与える影響 》

子どもたちにとっての貧困の影響は、

人生のスタートラインにたつ段階でのチャンスの不平等として

子どもにふさわしい生活や教育保障の権利侵害という実態として

人生の初めの時期に、希望・意欲・やる気までが奪われている現実として

現れやすい。希望は人生のチャレンジ権であり、人生初めの段階で、それ自体を手放さざるを得ない現実が子どもたちを覆いつつある。

貧困の連鎖の中で、子どもは親を選んで生まれて来られない。親の現実がそのまま、子供に2重3重に降りかかり、貧困を再生産されていく。そういう現実だと思います

《 すべり台社会 》

私の好きな人に、「湯浅誠」さんという方がおられます。著書の中で、「すべり台社会」というのをよく言われています。今の日本の就労というか雇用のあり方は、解雇されたりして、一回滑り落ちちゃうと上がれない、再チャレンジのない社会。やっと最近住所がなくても生活保護申請ができるというふうにかわってききましたけれど、一回ホームレスになると、そこから住居を確保して、仕事をしてという、そういう生活を送れるようになることが非常に大変なんですね。湯浅さんたちがやろうとしていることは、すべり台に階段をかけようということをや越し派遣村なんかでされています。

著書の中で、貧困状態に至る背景にある「五重の排除」として、教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家庭福祉からの排除、

公的福祉からの排除、自分自身からの排除を上げられていましたが、「自分自身からの排除」とは、どういうことなのか。生きる意欲がそがれてしまう。自分はだめな人間だ。解雇されて次にどこにも雇ってもらえないような、ダメな人間だ。これだけ困っていても、親も助けてくれない。兄弟も見てもぬふりをする。友達も同じ境遇でと。「自分はダメな人間で、生きている価値のない人間で、次の再就職のためのスキルを身につける勉強もしたくない。ダメ！ダ

メ！ダメ！」と自己卑下の連鎖というんですか。非常に怖いことだと思うんですね。10代20代って、先ほど子どもが、いろいろ失敗して、チャレンジしてという話しをしましたけど、一番人生悩み多い時でもあるけど、一番輝いているはずの若い世代の人たちが、自分自身に自信がなくてどうするんだ。こんな社会は何とかしないとイケない。湯浅さんは、「溜め」の重要性というのを言われている。余裕・ゆとり、お金だけではないゆとり。自分は就職はうまくいかなかったけれど、趣味にしているこの分野では、自分は自信を持っているし、これがあれば将来楽しいこともできるし、生きていける。

《 私たちにできること 》

自己卑下の連鎖の中で、落ち込んでいる人に対し、「あなたはやれば出来る。あなたのことを心配している、私の為に生きていて欲しい」と言うのが、最終的な呼びかけなんだろうと思います。「もし、あなたがここで命を絶ったり、大きな病気をしたり、怪我をするようなことがあれば、私が心配でたまらないし、一生後悔するから、お願い一緒に頑張る」というのが、最終的なサポートの姿勢だと思います。

自己肯定感。自尊感情というのは、「自分自身からの排除」の逆ですね。あなたは、「生きている価値がある」「わたしの為に生きていてほしい」そういうメッセージを伝え続けることが、子どもの自尊感情をはぐくむことになるんだろうと言われてます。

虐待された子どもというのは、親からおまへはダメな子だ、いらん子だ、クズだ。あんたがいるから私は離婚できなくて、この父ちゃんに苦労している。いろんな形で「生きていていい」ということと逆のメッセージを親から与え続けられています。

《 子ども手当は子ども単位に 》

子ども手当は、家族単位じゃなくて、子ども単位に出すべきだと思います。今日のご飯が食べられないという子に対して、教科書代として貯めときなさいと渡して、子供に使われるわけ

がないじゃないですか。使わないのは親が悪いのじゃなくて貧困が悪い。子ども一人一人に対して、給食を無料にするとか、学費を無料にするとか、子どもたちの現実の生活の中で、子どもにしっかりとバックアップできるような形での援助のあり方を考えていかないといけない。

児童養護施設に入っている子どもには、子ども手当はない。家族がないから。養護施設の方が非常に怒っていました。せめて高校に行くときの私費で買わないといけないものの為に、とっておきたかったのに。すごく悲しい。悔しいといわれていました。

何に重点を置いていただいたらいいか。やっぱり、医療と教育だろうと思います。医療というのは命の保障であり、将来きちんとした生活を生きるための根っこの部分での保障が医療だと思う。教育は未来への投資です。医療と教育は特に重点を置いて、貧困対策をおこなうような社会をつくっていかないといけない。衣食住はまず、住居。食と衣は個人の好みとかいう問題もあるんですけど、何にお金をかけていただくかということ、本当に安価で良質な住宅を望みます。

《 積極的格差 》

「積極的格差」というのは浅井先生の記事を読んでいただければ分かると思います。より社会的に排除された層の為に、より手厚い保障というか政策を取らないといけない。よくあるの

が、母子家庭のことで、生活保護基準を満たせばいいという論議がよくありますよね。社会的に排除された階層により手厚い保護をしないと、その子どもたちが生まれ持ってきた社会的なハンディを克服されないんだというのが、「積極的格差」という意味です。

《 福岡の弁護士さん達は 》

福岡の弁護団は何をしているかというと、児童相談所御用達弁護団。児童相談所が困ったら、弁護士さんに相談を持ちかけると、この問題はこの人が適任と言う事で出かけていく。さらにこの弁護団がすごいと思うのは、加害者の弁護を積極的にやっている。ほんとに虐待に至った親御さんの弁護をするのは、自分たちじゃないとできない。子どもも被害者だけど、親も被害者だから、自分たちは加害者の弁護を積極的にやっていくということで、活動されている。

《 運動に参加して 》

人と人とが繋がりながらネットワークをつかって運動していく。しかも続けるということが、確実に世の中を変えていく社会を変えていく力になるんだというのが、私自身の30年間のあゆみの中で思っています。私はそろそろ定年になるんですけど、ここに来られている若い方が是非、自分がどういう立場に立って、活動していくのかというそういう根っこを忘れずに、社会を変えていくという運動に参加して続けていただければと思います。

長時間労働とメンタルヘルス

とき 5月22日(土)

13時30分～17時

ところ 北九州パレス

内容 労働法制・制度、医学、運動の
コラボで、予防を中心としたディスカッションを！

